

沖縄・糸満市の昔話

本文資料

(前文化課文化係長)、上原善明氏(現文化課文化係長)の協力のもと、立命館大学説話文学研究会指導教授の福田晃がおこなった。

神話

1 アマミキヨと

ギジムナー

久高ですね、久高の一番古い二千八百二十何年前の天の話だ。歴史は古いよ。アマミキヨ。天から降りた神と書いてあるですよ、ね。アマミキヨ。また、男はシネリキヨと。シネリキヨ。男の神はシネリキヨ。

これがどうするかというと、恋をしましてね、久高のクバグスク。クバが生えているグスクになつて、いるわけですよ。こっちは二人、アマミキヨ・シネリキヨの恋した時代ですからね。

こっちな、お産すると。このヤナブー（テリハボク、オトギリソウ科）ですね、ヤナブーといって。固い木を肩に上から担いで。あの木を仕入れますね、あのアマミキヨは、お産する時には。またこっちでは人が死んだからね、カチャを張るわけです、萱を。あれはどうするかというと、このアマミキヨが、天の太陽が見えないように、月に見えないようにお産するといつて、この、幕張るわけですよ。肩にですね、刺があるから

ね、カタカする（さえぎる）わけですよ。これを、カタカしてお産するんです。

これを、木の精で、この、ヤノブの精が。これ、ギジムナーというのがこっちに、この木にガジマル（榕樹）の大きい穴が開くんだそうです。これが木の精といつて。これをお産する時に敷いてあるから、このギジムナー、この木に入るわけだそうです。これが木の精で、また出てきて化けたりするわけですよ。

それは何でこうなつておるかという、これは、お産。シネリキヨ・アマミキヨがお産する時に、アダンに刺がある。あれは、天のカタカするといつて、代表者は月様に見えたりさしてはいかと。神グスクは。

このギジムナーはこの木を守らんといかんといつて。これ、ギジムナーの、こっちに木の精というのは残つておるそうです。この下におつたら、ギジムナーがもう教えるそうです。いまでも昼でも、ヤナブの精たちは全部教えるそうです。これ、神の木です。